巻頭言

随想

Essays

栗原 健助*

Kensuke KURIHARA*

かえりみますと、まがりなりにも馬齢を重ねて、私は昨年4月定年になりました。よくお務めを果し得たものとホットしている今日この頃です。これも皆様の心暖まるご指導とご鞭撻のお陰と感謝の気持で一杯で、実感として深く脳裏にきざみこまれています。それだけにご期待にこたえられず、かえってご迷惑をかけた多くの数々が浮かんできます。二三の思い出を述べて、貴重な紙上をけがすこととお許し願いたいと思います。

昭和13年にさかのぼりますが、学校卒業後は否応なしに兵役に服する義務がありますので、二年間海軍に籍をおくことになりました。戦艦大和がまだ呉の造船台にのっており、1号艦として黒いペールに包まれている頃です。

一年は主として海上勤務の実習、後1年は広の海軍工廠航空機部の陸上勤務で昼夜兼行で機体、発動機の増産にとりくみました。この勤務で数多くのアルミニウム合金を知り、後日故大日方先生からご指導をうけるきっかけとなり、研究の末席をけがすことになったのです。

私が東北大学金研の大日方研究室に入りましたのは、終戦後間もない昭和23年でした。当時は極度の物資不足、名ばかりの配給制度、昼間は停電がつづき、研究室も何んとなく虚脱状態でありました。そんな状況の下で、研究を続行するために必要とあらば、無水アルコール、砂糖を配給するという通達がありました。これらの物資は日常生活においても、極端に不足していたので、のどから手のでるほど欲しいものでした。

そこで、アルミニウム-炭素系合金の状態図は未知の分野でありましたから、これをテーマにすれば両物資が得られるだろうと考え、申請はしたものの、10数講座ありますので、とてもあたるとは思わなかったのです。

ところがこれがあたり、予想外に早く、しかも申請書通りの所用量を入手できました。他の研究室の羨望的となり、砂糖と無水アルコールの保管には、いささか苦労いたしました。貴重な砂糖から純粋な炭素をつくり、顕微鏡試料の研磨溶液には無水アルコールを使用して、上述の研究を失敗をかさねながらもつづけました次第です。研究生活の日も浅く、研究のむずかしさを知ったのはこのときでありました。

ついで昭和27~28年頃と記憶しておりますが、製鉄メーカーで、脱酸剤としてアルミニウムの残材を取扱う従業員が素手でこれをつかみ、鉄鋼の溶湯に投入するので、手のひらに切りきずがたえず、それがもとで破傷風になるという生命にもかかわる事故がおきました。先生から早急にその投入残材の形状改善の指示がありまして、アルミニウムの溶湯を水中に滴下して、4~5g程度の球形状の粒をつくるべく、種々工夫をこらして、その製造法を確立することができ、いくばくかその期待にこたえることができたと考えています。

昭和40年宇都宮大学工学部の新設にともない、私は仙台から赴任してきました。当時敷地は2万坪、

* 宇都宮大学名誉教授

農学部畜産学科の後地で、家畜飼育用の木造バラックが残っており、そこに僅か3棟の工学部3学科の建物があるにすぎず、その風景は奇妙な組合せでありました。教官の数も少なく、一人で何役もかけもちするような状態がつづき、居室には電話もなく、材料関係として目ぼしい測定器具、実験用材料は何もありません。学生を指導する教材も殆んど皆無に近く、途方にくれてとまどいがつづき、毎日ふりまわされている感じでした。

少しきざな表現かも知れませんが、工学部づくりはどうしたらよいか、考えざるを得ませんでした。

そうしているうちに、学内の空気は次第に騒然となり、紛争にまきこまれるにがにがしい日々のできぐれに終始いたしました。これまで楽しかった研究生活とは打って変わった暗い学園生活を体験せざるを得ませんでした。

こんなすさんだ状況にあったにもかかわらず、皆様から数々の資料、文献、実験試材のご送付をうけ、何かとご助言、ご激励をうけて勇気づけられ、研究面では森永先生のご指導の下に、研究グループの一員として参加させていただき、多くの諸先生と共にたのしく研究を進めることができましたことは、曙光をみる思いで、感謝の念に耐えません。グループ諸先生の懇切丁寧なご指導は、単に研究面にとどまらず、学生の教育面においてもどれほどプラスになったか、はかり知れないものを痛感いたしております。

現在は敷地も5万坪にふえ、整備され、9学科となり教官の数も充実して、規模としてはまづまづのところまで発展してきています。

卒業生も大学院をふくめ、機械科だけで既に500余名を社会に送り出しています。私の赴任当時にくらべてみると、雲泥の差ということができましよう。

しかしながら、旧制大学のいずれもが創立90~100年になるということを聞くにつけ、伝統と歴史の重みをしみじみと感じております。

近頃人生70余年といわれています。定年を迎えたとはいえ、未だ数年は欲ばって、駄馬にむち打って、更に思い出の深いものを残したいと考えています。

第二の人生とは申すものの、現役同様にご指導とご交誼を賜りたいものと願っている次第です。